慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミス研究の展開 : スミス理解とマルクス
Sub Title	Recent development in the study on Adam Smith
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.2 (1949. 2) ,p.133(59)- 142(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19490201-0059
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490201-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

である。

この簡便法の方向係數の符號は一義的に決定されず、傾向を判斷して決めなければならないが、實際に符號を決めることが困難であるやうな場合は、二系列の相關度が極めて低い場合であるから、そのやうな系列に對して數學線を引くことは意義をもたない。從つて數學線を求める必要のある多くの場合は、直ちに符號を決めることができる（ここで述べた例では $r=+0.63$）。この方法が「最小一次法に比して計算が遙かに簡便であるばかりでなく、系列を二分する必要がないからより合理的である。而して最小距離自乘法の法簡便であるから、趨勢變動を除去するためにも、又傾向を判斷する上にも實用的であつて、適用範圍も廣く用ひることができる。（註）

（1）、（2）、（3）拙稿「數學線に就いて」三田學會雜誌、第四十一卷、第十一、十二合併號參照

註　この簡便法は所得不平等度の測度として、パレイト常數の測定に宗藤圭三博士が「統計學原理」（昭和五年）、及び「統計學通論」（昭和十四年）に於て既に述べられてゐるのであるが、この方法が最小距離自乘法の第二義の簡便法であることには觸れてをられないやうである。

尚、最小一次法は Mills, Statistical Methods 1929 及宗藤博士「統計學原理」にみられる。

（一九四八・一二・二五）

アダム・スミス研究の展開

――スミス理解とマルクス――

島崎隆夫

一

「地球は二つの生產樣式の二つの支配領域に、激しい闘ひに於て相對立してゐる二つの世界に分たれて」戰後の新らしい經濟の歩みをつゞけてゐる。一方「社會主義の新世界」に於ては社會主義社會の建設のため、經濟科學は一つの有力なる武器として重要なる役割を果しつゝある。他方「資本主義の舊世界」に於ては、戰後に於ける資本主義社會の危機と克服、新らしき秩序の建設の努力がなされつゝあるが、然し、資本主義社會の危機の激化につれて、資本主義社會それ自體に對する不信と、資本主義社會の限界の認識とが愈々深められ、今や資本主義社會變革の課題が實踐的課題として全面的に現はれて來たのであつた。この事實と共に、資本主義社會の土壤の上に成立し、發展し、而も、資本主義に奉仕するを以て任とするが如き、經濟學そのものに反省が要請せられて來たのは當然なことであつた。これは、經濟學の與へる理論的體系と日々發展して止まない經濟社會の現實それ自身との喰ひ違ひが益々激しくなつたことを示すものである。即、經濟學の發生せる青年時代に於ては、「絶對主義に對する向上的ブルジョアジーの一武器」として、經濟學は新らしき時代の誕生に生々と奉仕し、それは進步的意義を有してゐたものであつたが、今日に於て、一部の經濟學が眞に現實の要請に對して力强き武器たり得るか、眞に進步的意義を持ち得るか、が反省せしめられるに至つたのである。かくて、我々は經濟學を反省し、資本主義社會それ自體を全機構的に、全體系的に

把握し得、而も、變革の實踐的課題をも解決してくれる理論を求めるのである。それは資本主義社會の持つ固有な機構、換言すれば、近代的市民社會の機構それ自身を把握し、鋭く批判し得る强力なる理論であること、かゝる資本主義社會の機構的體系的把握が果される時、資本主義社會の限界が正しく認識され、遂には、それの變革の理論をも、明白に我々に示してくれるものであろう。

元來、經濟學が一つの科學として獨立領域を確立し得たのは、近代的市民社會の持つ姿を全機構的に、全體系的に把握することが可能となつたその時であつた。この成功は「經濟學の生きた地盤」の存在したイギリス及びフランスに於て爲しとげられたのであつて、この經濟學の成立と云ふ偉大なる名譽はアダム・スミスに與へられたものであつた。スミスの經濟學はブルジョア的であつたが「階級闘爭が未發展な時期」にあつたが故に、スミス經濟學は資本主義社會――近代市民社會の全貌をとらはれることなしに研究し、把握する事が出來たのであつたが「階級闘爭が實踐的および理論的に、ますます公然且威嚇的な諸形態をとる」に及んで、それ以後に於けるブルジョア經濟學は眞に「科學的」たり得る事が出來なかつた。私心のない研究は經濟學より追放され「心やましく意圖あしき論辯」が現はれて來たのであつた。スミス經濟學はたとひ未成熟の個所、精密なる理論の缺除があつたとは云へ、資本主義社會――近代的市民社會を全機構的全體系的に正しく把握し得た點は誠に偉大だと云はねばならない。我々が今日に於てアダム・スミスの全思想體系を繰返し回顧反省し、スミス經濟學を學ぶ所以のものは、スミスより資本主義社會――近代的市民社會それ自體の構造を正しく把握し得る理論への示唆を得たいと考へるからである。

さて、我々は一つの完成された經濟學を、カール・マルクスの經濟學に見出すのである。「科學性」を失ひつゞけて來たブルジョアー經濟學に對して、眞に「科學性」を恢復し「古典派經濟學を克服することによりて之を完成した」人はカール・マルクスであつた。マルクス經濟學は資本制生産樣式の諸法則＝「近代的社會の經濟的運動法則」を暴露することを最後の窮極目的とするものであり、それは資本主義社會の發展を、崩壞を、そして變革の論理を我々に教ふるものであつた。マルクス經濟學は新らしい階級の解放闘爭の鋭い武器となり、社會主義社會建設のための有力なる一武器となつたのであつた。

今日、資本主義社會圏にある人々にとつて、資本主義社會の危機の克服、再建――それは資本主義社會の限界の認識と變革の實踐へと向はせるであろうが――は誠に時代的課題として極めて重要なるものであつて、右の二人――アダム・スミスとカール・マルクス――の偉大なる科學者、思想家の經濟學を相對比しつゝ學ぶことにより、時代的課題の解決への接近と多くの示唆とを見出すであろうと思ふ。

特にアダム・スミス經濟學の研究は戰前或は戰時を通じて、主として時代的要請であつた經濟と倫理との關聯の視角より、或は、生産力增强の要請に應じてフリードリッヒ・リストとの對比に於て、取り扱はれたのであつた。戰後に於けるスミス經濟學研究の方向は如何なるものであろうか。この問題を展望するために、近刊の著書を手掛りとして、論を進めてみたいと思ふ。

二

我國に於けるアダム・スミス研究の歴史は決して新らしいものではない。經濟學の研究は實はイギリス古典學派の研究を意味しており、古典學派研究中に於て、スミス研究の位置は極めて重要であつたが故に、我國經濟學研究の歴史は又アダム・スミス經濟學研究の歴史と呼應してゐたとさへ考へられる。今は過去の我國スミス經濟學研究の歴史を詳細に述べるべき機會ではないが、（註）特に、我々はスミス生誕二〇〇年記念祭、及、スミス死後一五〇年記念祭（一九四〇年）をきして、多くの貴重なる研究がスミス經濟學研究史上に加へられたことは誠によろこばしいことである。

スミス經濟學研究の展望を行ふに當りて、スミス研究を志す學徒にとり、何よりもよろこばしきことはアダム・スミスの主著が最近に至り次々と邦語に譯了せられたことである。スミスの主著及その邦譯を左に掲げておく。

1. The Theory of moral sentiments, 1759.
2. An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776.
3. Lectures on Justice, Police, Revenue, and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, reported by a student in 1763 and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan, Oxford, at the Clasendon Press, 1896.
4. W. R. Scott, Adam Smith, as a student and professor, 1937, Part III, An early draft of

part of the Wealth of Nations.

右の譯文

一、道德情操論　米林富男譯（昭和二十三年）

二、國富論　大内兵衛譯（岩波文庫版）

竹内謙二譯（改造文庫版）

三、グラスゴー大學講義　高島善哉　水田洋譯

（昭和二十二年）

政治經濟國防講義案　樫原信一譯

（昭和十八年）

四、國富論草稿　水田洋譯（昭和二十三年）

國富論草稿其他　大道安次郎譯

（昭和二十三年）

（大道氏の譯書の中には、國富論の草稿の外、「エヂンバラ講義」及「エヂンバラ評論」への寄稿文」を含んでゐる。）

（註）アダム・スミス經濟學研究文献及參考書に關しては、古くは舞出長五郎著「經濟學史概要」上卷附錄「アダム・スミス參考書」、近くは、東京商科大學一橋新聞部編「經濟學研究の栞」（經濟學說史篇）中の第三章古典學派（高島善哉氏擔當）が極めて簡潔なアダム・スミス經濟學研究の紹介と參考文献を示してゐる。

三

極めてユニイクなアダム・スミス研究として、第一に、大道安次郎氏により今日まで研究が進められて來たスミス經濟學――全思想體系の文献學的並に知識社會學的研究の成果を高く評價するものである。大道氏の今日までの主たる學的著作は「スミス經濟學の生成と發展」（昭和十五年）及び「スミス經濟學の系譜」（昭和二十二年）であつて、此の二著はスミス經濟學をその生成と發展の過程に於て把へること、即、スミス經濟學が如何なるプロセスを經て成立したか、（序文參照）等のスミス研究上極めて重要なる課題に對して、自ら答へられた二部作である。前者は「スミス自身に即して」彼の思想内部に於て經濟學的思想が如何に生成發展して、遂に「國富論」を完成させるに至つたかを探求するために書かれたものであつて、後者は主としてスミス經濟學の生成過程をその生成發展の地盤――背景との關聯に於て見られ、特にその地盤――背景への探求を企圖されたものであつた。

さて、スミス研究課題中重要なる問題として周知の所謂「アダム・スミス問題」"Das Adam Smith-Problem"があつた。それはスミスの思想體系の生成發展に於て、或は、彼の思想體系の構成に於て、經濟學の占むべき位置が問題とされた時、スミスの道德哲學と經濟學、＝道德情操論と國富論を貫く原理としての利他心同情と利己心との間にあつて一つの矛盾があるかどうかの問題であつた。このアダム・スミス問題は戰前戰時に於て、經濟と倫理との關聯が反省された時、我國に於ても重要な問題として取扱はれたのであつて、既に刊行されたものゝ中に、大河内一男氏「スミスとリスト」（昭和十八年）、或は、同氏「獨逸社會政策史」（昭和十二年）、及び、高島善哉氏「經濟社會學の根本問題」（昭和十六年）等があつて、それ〴〵の立場より詳細に論ぜられてゐた。大道氏の前著「スミス經濟學の生成と發展」に於ても、廣くスミス道德哲學と經濟學との關聯、前者より後者への發展が取り扱はれてゐる。氏はスミス道德哲學體系の研究を通じて、經濟學への動機を探り、更に道德哲學と經濟學との關聯にふれる。即、そこに於ては、經濟學的企圖が具體的に遂行された場合、國富論に於て道德哲學の根本的精神が如何に滲透し指導原理となつたかを、或は言葉をかへれば、道德哲學の全體系の中から經濟的なものが如何に生成し、分化、發展して來たかの面を探求されたのであつた。（第一章より第三章まで）

更に、氏は（第四章、第五章に於て）經濟學的な部門に注目され、スミス經濟學がその初歩の生成より國富論にまで發展して行つた跡を探求される。即、貴重なるスミスの經濟學的ドキュメントたる「エヂンバラ講義」、「グラスゴー大學講義」、「國富論の草稿」、及「國富論」の四者の關聯、及び、發展を探ることにより、スミス經濟學の金字塔「國富論」（一七七六年）に至るまでのスミス經濟思想の發展の跡を明らかにせられたものであつた。

大道氏の第二の著作「スミス經濟學の系譜」は前著とは觀點を異にし、外在的にスミス經濟學の生成過程を見究めること、即、スミス經濟學の生成と發展の地盤――背景への探求を中心とした勞作である。スミス經濟學の生成と發展の地盤が十八世紀中葉のイギリス市民社會であり、當時のイギリス思想家の諸思想がその土壤であつたが故に、スミス經濟學的思想をその先蹤的思想との關聯を通じて、歷史的社會的地盤――背景が探求されたのであつた。スミスの道德哲學、自然神學、倫理學、法學の思想的系譜が探ねられ、遂に「經濟學の獨立」に至る事情が知識社會學的方法を援用されつゝ、（前篇）更に、（後篇に於て、）スミス經濟學中重要なる諸思想である

「經濟人、個人主義、見えざる手、自然的自由、國民性、」がそれ〴〵問はれたのであつた。

かくの如く、スミス經濟學の生成と發展を或はスミス自身に即して內在的に、或は他の諸思想との關聯に於て外在的に、存在論的、知識社會學的側面より考察せられた大道氏の諸研究に對して、最近に至り一つの批判を見るに至つたのであつて、それは田中吉六氏「スミスとマルクス」に於て行はれたものであつた。

四

スミス研究に於て右に述べた「アダム・スミス問題」と共に、スミスに於て如何なる意味で經濟學が成立したと云へるか、スミス自身の思想に於て如何に道德哲學より經濟學への發展がなされたか、(既に前に若干ふれた)更に、スミス經濟學とスミス以後に於ける經濟學(特にマルクス經濟學)との對比における諸問題等が重要なるものとなろう。

右に述べた如く、スミス經濟學の生成と發展の地盤——背景を知識社會學的立場より探求せられた大道氏の諸論著に對して、唯物論的原則の上に立ち、批判を加へられたものに、田中吉六氏「スミスとマルクス」(昭和二十三年)がある。田中氏は本書に於て、先づ經濟學が科學として樹立されるには如何なる條件を必要とするか——經濟學が「國富論」によつてはじめて科學になつたと云ふ意味は何か——を考察せられ、こゝで、右の成立を「對象的條件」を抜きにして「經濟學」の樹立を論ぜんとする主觀的解釋の一典型としての杉村博士のスミス解釋を批判される。氏は經濟學が一つの獨立した經驗科學として樹立されるためにはたゞ單にそれを主觀的に解釋したのでは不充分であつて、經濟學の對象としての經濟社會が人間の意識から獨立した自立的な領域として客觀的に觀察されることが極めて重要なる所以を力說され、そのためにはかゝる對象そのものゝ一定の發展、成熟がなされる事が必要であることを力說されるのである。即、產業資本の一定の成熟——具體的に云へば十八世紀中葉に於けるイギリス市民社會の成熟=經濟學の生きた地盤の成立——が必要なのであつて、これが經濟學樹立のための不可缺の客觀的條件となることを認識すべきであると云ふ。スミスが國富論に於て、經濟學を一つの獨立科學として樹立したと云ふ意味は、スミスが經濟學の對象たる經濟社會——實は十八世紀中葉の英國市民社會を一つの自立的な獨立領域として客觀的に規定し得たことを示すのであつた。そのためには產業資本の確立に向つて、資本制生產の一定の成熟が前提され、かゝる產業資本の確立を押し進める實踐上の課題を中心として、而も、對象を客觀的に規定する原理として、自然法思想を適用したのであつて、かゝる經濟社會への自然法思想の具體的適用を通じて、國富論が經濟學の樹立と云ふ最初の偉大なる巨步を進めることになつたのである。即、これは近代市民社會の固有の矛盾の發展、その矛盾の克服、そのために近代自然法理論の發展——ホッブス、更にロックに於ける發展——を論證せられつゝ(第一章、第二章)、遂にそれがスミスに於て經濟社會への自然法的思想の具體的適用が完成された事を意味したのであつた。

第二の課題として、スミス自身の內部における思想の發展——道德情操論より國富論への發展——を考察される場合、大道氏が先の論著に於て試みられた知識社會學考察に對して批判を加へられたのであつた。(第四章)

更に、田中氏はスミス國富論よりマルクス資本論への理論的發展、資本論を理論的體系として組立たせ、その中に貫いている論理が歷史的に如何に形成されて來たかを問ふ。スミス經濟學に於て、一つの思想——近代自然法思想——の具體的な經濟社會への適用の中に、その樹立の根據を探り、かく背景となる思想の變遷——更にその土臺となるべき近代的市民社會の變質を探求された氏は、スミス經濟學に於て近代的自然法が演じたその役割を、マルクス經濟學に於ける史的唯物論の思想に見たのであつて、スミス經濟學よりマルクス經濟學への發展は、近代自然法理論より史的唯物論への發展なのであつて、このことは研究對象それ自身の著しい發展、即、經濟社會における生產力と生產關係との著しい發展、を土臺として、それらを辯證法的統一における物質性として、より嚴密に、客觀的・質的に規定するための原理として「史的唯物論」が「自然法」に代つて位置を占めたと考へられたのであつた。スミス經濟學と同樣マルクス經濟學が科學として樹立せらるゝためには、一は近代自然法理論、他は史的唯物論をその思想原理として持ち、更に研究對象が共に人間意識から獨立した客觀的實在として規定されたと云ふ必須の條件が必要であつたのである。

スミス經濟學は常にマルクス經濟學との對比に於て、後者の光を通じて、前者の性格が問はれたのであつた。(第五章)

五

マルクス經濟學を通じてスミス經濟學に接近し、それ

を正しく意義づけ、解釋しやうとする努力は最近に至り特に盛になつて來た。かつて中山伊知郎氏「スミス・國富論」に於て爲された純粹經濟學的立場よりするスミス經濟學の解釋と好一對をなすものである。その方向として、越村信三郎氏「スミス經濟學說」(昭和二十一年)がある。

前述せる如く、經濟學が科學として成立し得たのは近代市民社會が機構的・體系的把握が可能となつた以後の事であつた。このことは一は「勞働」の範疇が見出され、確立された事に關聯し、他は社會的再生產過程として經濟社會の運動過程が把握されたことに關聯してゐる。社會の再生產的把握はフイヂオクラートにより初められ、更に、それはスミスにより發展せしめられるのであつて、越村氏は主としてスミス國富論第二編「資財の性質、蓄積、及び用途について」――資本の理論、再生產の理論を探求され、それは常にマルクスにより完成せられた理論より、スミス再生產――資本蓄積論の把握であり、再編成を試みられたものであつた。

レーニンは「發達」の中で「スミスの二つの誤謬(不變資本の生產物價値からの除去と、個人的消費と生產的消費との混同)の訂正こそは、マルクスに、その注目に

値ひする資本主義社會に於ける社會的生產物の實現の理論を樹立する可能性を與へたのであつた」(レーニン「ロシヤに於ける資本主義の發達」大山譯、南北書院版二三頁)と記してゐる如く、我々が實現の問題を考へる場合、マルクス理論の完成は實はスミスの再生產論の持つ根本的誤謬を批判しつくした事を意味するのであつて、スミス資本蓄積論――再生產論の持つ特質と誤謬とを正しく認識する事が極めて重要なのである。この事は一はスミスの持つ所謂「V+Mドグマ」の克服であり、他は二部門分割の正しき認識であつた。それ故、スミス再生產――資本蓄積論の考察は彼の理論の未成熟、觀念の混亂、誤謬、の發見を通じて、正しい再生產――資本蓄積論への道を探ることなのである。

此點、越村氏の前掲書は、スミス再生產――資本蓄積論の持つ混亂を巧みにマルクスの線に於て再編成されたものであつて、スミス理解の上に極めて多くの示唆を與へるものと云はねばならない。更に、最近、スミス資本蓄積に關し、藤塚知義氏による論文がある。(「アダム・スミスの資本蓄積論」金融經濟研究一九四六年五月、社會科學九號及十號)越村氏と同樣、マルクス再生產論の上に、スミス再生產――資本蓄積論を分析批判せるもの

であつた。

スミス再生產――資本蓄積論批判に於て、第一にスミス自身の「價値論」批判と云ふより根本的な問題と關聯することであるが、所謂「V+Mドグマ」批判が考へられて來た。此點に關しては越村・藤塚兩氏により詳細なる展開を見たのであつたが、第二の「二部門分割」の問題に於ては比較的ふれる事少いと思はれる。此の點は更に追求せらるべきであろう。右の二問題が正しく批判される事が、再生產論把握のために極めて重要である。

スミス再生產、資本蓄積論への探求は最近再生產――資本蓄積論の反省を機に著しく活潑になされつゝあつて、スミス研究の最近の一つの特色をなしてゐると思はれる。此の場合に於ても、スミスはマルクスとの對比に於て取り上げられてゐるのであつた。

六

先に我々は近代市民社會それ自身の反省が要請されてゐる點にふれた。今、我々は直接「近代的市民社會」の分析を對象として書かれたものゝ一つに、難波田春夫氏「スミス・ヘーゲル・マルクス」(昭昭二十三年)をあげることが出來る。スミスとヘーゲル・そしてマルクスの三者によつて「近代的市民社會」が如何に把握されたか、その把握の仕方の相異、及三者間の發展の追求が重要な課題となつてゐる。問題の提起そのものには多くの賛意を表するものである。即、本書は、スミス・ヘーゲル・マルクスの三者が近代的市民社會を如何に見、如何に批判し、如何にして異る結論を取り出したかを論ずることを通して、近代市民社會の論理の把握に問はんとして(序文參照)書かれたものであつた。

今詳細に內容を紹介する機を持たないが、本書が取られた批判的・觀照的立場よりする市民社會の分析の中には、主體的立場、實踐への要請に答へるものが、即市民社會それ自身の持つ矛盾の正しき把握、市民社會それ自身の變革の問題に關しての示唆を受ける事極めて少しと思はれる。

更に、我々は高島善哉氏によりなされつゝある「經濟社會學」の樹立の視點より試みられたスミス研究の貴重なる成果が與へられてゐる。(「經濟社會學の根本問題」「アダム・スミスの市民社會體系」等)が、他の機會にゆずりたいと思ふ。

七

以上、二三の近刊書をたよりにスミス研究を回顧したのであつたが、それらが「スミスとマルクス」との對比

に於て書かれてゐる點が相共通して居た。勿論、スミスがマルクスとの對比に於て見られたのは今日に始るものではなく、古い。それが今日に於て、特に對比せられ、論ぜられるに至つた點については充分反省せられなければならない。

スミス（古典學派）よりマルクス（社會主義經濟學）への理論の發展を、學說史的に探求する事は、特に中間にリカードを介して發展せしめられた勞働價値說の發展を考へる場合極めて重要であつて、今後と云へども、この發展はより深く研究されねばならない。然しながら、我々はアダム・スミスの經濟學の正しい把握を可能ならしめ、スミス經濟學の持つ時代的意義と時代的制約性とをあやまりなく了解し得るためには、完成せられた理論を通して爲される事が極めて重要であると考へる。

スミス經濟學は勞働價値說の上に立ちて、再度反省せしめられる時に、スミス經濟學の歷史的意義は正しく把握しえられ、同時に、スミス經濟學が研究對象とした「近代的市民社會」の構造が全機構的・體系的に把握し得る根據が與へられるのであつて、かくしてのみ、市民社會――資本主義社會の危機を克服し得る變革の論理がより明白に與へられて來るのではなからうか。

（二四、一、二二）

前號（第四十二卷第一號）目次

論說

シュマーレンバッハの經營經濟學研究方法について(一)……小高泰雄

マルクスの階級論について――一つの覺書――……古澤源刀

資料

英國近代社會の生成と賃銀理論――賃銀學說史序說(一)――……平井新

價格體系の變化の法則に關する覺書……黒川俊雄

……福岡正夫

編輯後記

「……一國の暴政は必ずしも暴君暴吏の所爲のみに非ず共實は人民の無智を以て自から招く禍なり……人民若し暴政を避けんと欲せば速に學問に志し自から才能を高くして政府と相對し同位同等の地位に登らざる可らず是即ち余輩の勸る學問の趣意なり（福澤諭吉「學問のすゝめ」）

この烈い先生の言葉のうちに、封建主義に抗し、絶對主義に相對して眞に人民の無智無氣力を嘆じつゝ、民衆をして眞に獨立せしめんとする偉大なる熱情の叫びを聞くことができる。

民衆の幸福を計り、人民の獨立、解放を企圖しえぬ學問は眞の學問ではない。いたずらに特定の主人に奉仕し、緣を喰むを任とする學問は學問ではない。我國への學問の移入の歷史を回顧するとき、當初は封建制度、及び、絶對主義に對する批判、抵抗、變革の契機をもつて入りながら、日本ブルジョアジーが絶對主義との闘爭を避けて妥協するに至つたその時より、絶對主義的秩序の維持、固着に、そのための人民支配の具になり。それはもはや本來の人民のための、民衆の幸福のための學ではなく、眞の科學性を喪失した單なる技術學の名すらうけるものにだしてきたことを知るのである。

今日とそ、今一度福澤先生の言葉を吟味し、民衆と共にある學問再建を熟考することが大切であらう。

× × ×

北大西洋條約調印の終了した今日、ようやく二月號を世に送ることが出來た。御一讀せられんことを切望して止まない。

最後に、本誌が一般書店より入手出來ずとの非難の聲を度々聞く、當方の出版事情もさることながら、何とも申譯ない次第である。廣く本誌が讀まれ、批判檢討せらることにより、學的水準を高めると共に、何等かの意味で學界に寄與し、民衆啓發の具に資しうれば幸と念じている。

（S.）

昭和二十四年一月二十五日印刷　昭和二十四年二月一日發行　第四十三卷第二號

本號定價　金五拾圓　送料四圓

禁轉載

編輯兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部內　高村象平

印刷者　東京都港區芝三田豐岡町八　川口芳太郎

印刷所　東京都港區芝三田豐岡町八　図書印刷株式会社

豫約購讀料一年分　金六〇〇圓（送料共）　半ケ年　金三〇〇圓（〃）

◎豫約購讀料は發賣所宛お拂込み下さい。
◎誌代變更の場合は精算決濟致します。
◎編輯に關する用件は發行所へ。
◎營業に關する用件、購讀申込は發賣所へ願ひます。

發行所　東京都港區芝三田三丁目慶應義塾大學經濟學部研究室內　慶應義塾經濟學會

發賣所　東京都港區芝三田二ノ一　慶應出版社　日本出版協會員B一一一〇一六　日本出版協會員A一一一〇一九